

Investor Relations 尾崎副社長が語る“TECブランド”

TECブランドを支える“信頼”と人材集団

TEC In-depth 次世代クリーンエネルギー

DMEプラントを中国向けに受注 — エネルギー用途としては世界初のプラント

TEC In-depth

R&Dエンジニアリングを積極的に展開、プラント受注にいたる実績も

Project Moving-on サウジアラビア向け

世界最大のEO・EGプラントを受注



TEC COMMUNICATIONS

TEC

Vol. 4 Jan. 2003

COMM.

TECブランドを支える“信頼”と人材集団

Accountability

「私が一番うれしく思うのは、海外のお客様からTECの仕事に対する信頼の言葉を耳にする時です」と語る尾崎利幸副社長。今回は、海外のプラントビジネスの第一線で活躍される尾崎副社長から、顧客に信頼される“TECブランド”の背景にあるものを掘り起こします。

尾崎副社長が語る
“TECブランド”

東洋エンジニアリング株式会社
取締役副社長

尾崎利幸

外と内から見たTEC

Q 尾崎副社長は、日本輸出銀行(現 国際協力銀行)における豊富なキャリアを経てTECに来られたわけですが、外から見ておられた時と、中に入られてからでは、TECについて何か違いのようなものを感じられることはありますか。

輸 銀時代は中立的な立場であり、営業などのごく限られた人達としか接しておらず、外からではエンジニアリングという仕事の全体像が見えていませんでした。初めは、“世界を股にかけ、生き生きしている面白そうな会社だ”という印象でした。実際にTECの中に入ってプロジェクトの第一線で活躍する人達と接してまず思ったことは、一人ひとりが非常にはつらつと仕事をしているということでした。世界を舞台に競争に打ち勝ち、プラント建設という難しい仕事を通してその国の経済発展に貢献するという、やりがいを感じながら仕事に打ち込む優秀な人材で構成されているパワフルな集団だと実感しました。

またTECでは伝統的に人材育成を重視し、例えば社内に「TEC大学」というユニークな教育プログラムも根付いています。プロジェクトはそれぞれが一品料理のようなもので、素材選びから始まり、調理・味付けまで一貫して良いもの

を作り上げるには、技術はもちろん、広範囲の知見・識見、多国籍の人をマネージする能力や語学力など、プロジェクトマネジャー(PM)の能力なしには語れません。そうした総合力を備えた優秀なPMこそ“エンジニアリング会社の源泉である”と私は確信しています。顧客から指名されるようなPMが数多くいることがTECの強みであり、そのためには人材育成とレベルアップが大切だと思っています。

TECビジネスの特色とは何か

—— “TECブランド”を形成する
“信頼”と“ビジネスモデル”

Q それでは、ビジネスの方に移りますが、あらためてTECビジネスの特色について教えてください。

◎インド、ロシア、中国での 卓越した実績

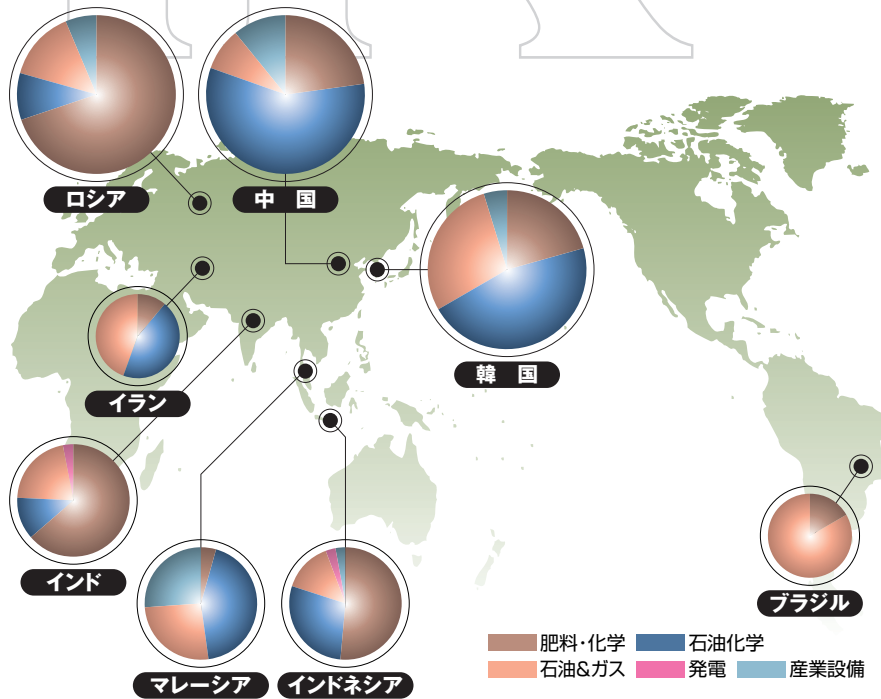
T ECは、世界各国の経済発展に資する重要な仕事、それもTECの規模から考えると非常に大きな事業を40年の歴史を通して営んでおり、ビジネスの特徴は、それら事業の持つ国際性や多様性にあると言えます。特に、アンモニアや尿素などの肥料や、エチレンなどの石油化学のプラントを中心に、インドでは30件以上、ロシア(旧ソ連圏)では60件以上、中国では100件に近いという卓越したプラン

ト建設実績が示すように、これら3大市場における強みはTECの真骨頂と言えます。同一国で継続的に受注できることは、顧客のTECに寄せる信頼の大きさを物語るものです。一方、1980年代からの東南アジア、南米、中東への市場拡大に伴い、同様に事業の継続性を維持できた背景には、こうした信頼と実績があるからと言えましょう。

◎“TECブランド”への顧客の信頼

私 が各国を訪れるたびに誇らしく思うことは、馴染みのお客様からTECの仕事への評価と感謝の声を聞く機会が多いということです。先日も中国でのプラント完工式典に出席し、客先幹部から、プラントの品質を守って納期前の引き渡しを達成したTECの仕事ぶりに対する賞賛と感謝の言葉をいただき、また昨年夏にはブラジル石油公社(PETROBRAS)の総裁からも約束通りの工期で完成したことへの感謝の言葉をいただき、大変誇りに思いました。こうしたプロジェクト成功の背景には、会社を挙げての不断の努力と個々人の高い能力の裏付けがあり、それによって得た信頼と評価は、一国に限らず広く世界をめぐって“TECブランド”を形成していく基盤になります。事業の多様性という点では、途上国向けを中心に取り組んでいますと、メジャー相手の仕事と異なり、プラント品目は石油、ガス、石油化学、インフラ、産業設

海外プラント実績(主要地域)



備など、多岐にわたり、総合エンジニアリング技術力とプロジェクトマネジメント能力を駆使した一貫した仕事への体制が問われます。この意味でもTECの培った多様な事業への対応力というのが、もう一つのビジネスの特徴であると思います。

◎事業の社会性と広がりに対応できるビジネスモデル

もう一点触れねばならないのは、事業の社会性と広がりについてです。相手国や顧客の広がりの中でプラント輸出という大きな仕事を成し遂げるには、多くの関係者との協調が不可欠です。特に、商社とのマーケティング面での協力関係や国際協力銀行を中心とする制度金融及び貿易保険と

の連携こそ我々のビジネスモデルであり、これらなくしてはTECの技術も活かすことができません。このビジネスモデルは、80%以上を海外に、しかも途上国が中心となるTECのプラント建設においては必要不可欠であり、他社に比べてもこの点こそTECのユニークな特徴だと言えるでしょう。例えばメジャー相手の仕事の場合ですと、お客様自ら資金調達ができますので、こうしたビジネスモデルは不要です。それが資金もなくリスクも高い途上国での案件となりますと、国の支援を応用してお客様が望まれる形でのファイナンスやリスク対応の成否が、そのプロジェクトの事業性を左右し受注の成否を決める鍵となってきます。昨今、契約の大型化とそれに

伴うリスク増大、さらには単なるプラント輸出からJV型やパートナー型での仕事の進め方への変化など、複雑化して変化の早いなかで行うEPCの仕事はますます難しくなっています。お客様サイドの環境変化を捉えていかに満足してもらえるかは、このビジネスモデルの優劣如何といっても過言ではありません。逆に私たちはそこにやり甲斐を感じていますし、それに応える体制を構築できることがTECの強みであり、差別化された点であると思います。

変化を捉えて新しい発想につなげる

—EPCの先進化へ

Q そうした特徴を活かしてさらに前進するために、尾崎副社長としてはどんな姿勢で臨み、また当面の課題にどう対処していられるのでしょうか。

T ECは今まで60余カ国にわたり1,300件を超えるプラント建設の実績を持っていますが、国情や国民性の異なる人達と一緒に仕事をする場合、個々人が優れた国際性を身につけねばなりません。特にPMとしての優れた資質と高いリスク管理能力が問われてきます。広い視野に立ち、めまぐるしく変化する世界の政治・経済動向にも目を向け、関係者との幅広いコミュニ

ケーションを図らねばなりません。しかも、激しい市場変化は事業機会の拡大にもつながるので、そうした変化に対して従来の常識にとらわれず、私たちは切磋琢磨し常に新しいEPCの発想に結びつけて考えていく必要があります。中国を例に取りますと、今やプラントの輸入国から輸出国に転じようとしています。このような環境変化が一層進むとEPCの空洞化も起こりますので、今後は我々にしかできないような“Added Value EPC”を提案することがますます重要になるでしょう。このような認識を常に新たにし、知恵を出して新しいEPCの世界を次々と創り出していくことが、私たちに課せられた使命であると思います。

2002年度は経営安定化に向けた構造改革の最終年度に当たります。社長以下全員が努力し、この3年間で業務改革、財務体質の強化、経営改革、人事改革など、全体のスリム化を図ってきました。伝統あるTECの文化にまでメスを入れ、かなりの改革をこなしたことで、受注の増大と本業での黒字化も達成できるようになりました。安定経営に向けた“枠組み作り”ができましたので、これからは社内での危機意識の共有をバネにして、さらなる“地盤固め”を行いつつ、前向

きに新しいEPCに取り組んでいかねばならないと考えています。

今後の展望

強みを活かした選択と集中による一層の差別化へ

Q 今後TECが重点的に取り組むべき具体策とは何でしょうか。

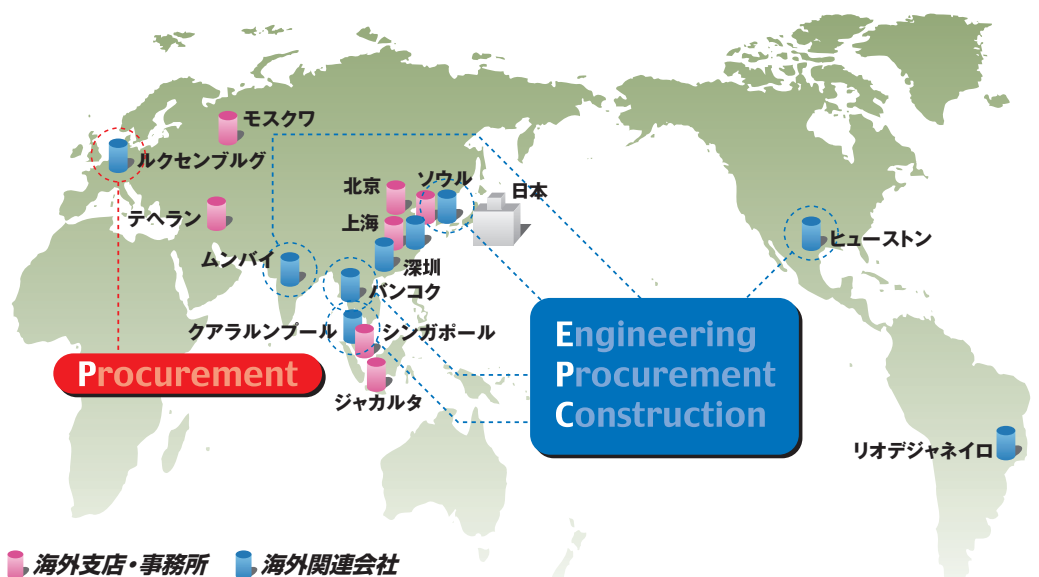
T ECはプラントとITを事業の2本柱としていますが、海外・国内を問わず、まず“プラント事業においていかに競争力を高めるか”につき、次の3点をあげたいと思います。

一つは“技術開発力の強化”で、これは技術を売り物とするエンジニアリング会社における差別化の源泉とも言えます。TECに来てか

ら技術を大事にする伝統を肌で感じてきましたが、特に重点分野の技術をさらに強化していくことが、この差別化を一層際立たせることになると思います。重点分野としては、自社保有技術である“ACES21”等の尿素技術、次世代エネルギー技術であるGTL・DME等に活かされる合成ガス製造技術があり、昨年他社に先駆け中国にDME技術を売ることができました。これらはTECが誇る独自技術であり、今後の成長の原動力と言えるものです。

二つ目は、“コスト競争力の一層の向上”です。TECが他社に先んじて手がけてきた海外拠点づくりは、トランスナショナル（TN）体制として現在インド、タイ、韓国に加えてマレーシアが第4の柱になりつつあります。特筆すべきは、“アドバンスト・トランスナショナル・ネットワー

TECグローバルネットワーク





PROFILE

取締役副社長 **尾崎 利幸**
Ozaki Toshiyuki

昭和11年、神奈川県に生まれる。昭和34年、東京外国語大学を卒業し、日本輸出入銀行（現 国際協力銀行）に入行。35年余勤務した銀行では、調査からスタートし、審査・営業・財務・人事など様々な分野の業務に携わる。この間、ブラジルとメキシコの2度の海外駐在を経験。平成3年、同行理事を経て、平成6年に東洋エンジニアリング(株)に入社。顧問、専務取締役を経て、平成8年より現職。

「TECとの初めての出会いは、昭和50年頃、TECの旧ソ連向け肥料プラント輸出にかかわるバンクローン交渉に参加したのがきっかけでした。TECの関係者の皆さんが、プラント輸出の実現に向けて燃やしていた情熱には圧倒されました」と当時の思い出を語る。昨年は、ブラジル、中国、インドネシア、シンガポールなど世界各地へ出張し、精力的に客先トップに会うとともに、秋に開催された日ロ経済合同会議では、プレゼンターとしてロシアにおける卓越したTECの経験をアピールした。

ク”のインフラが整備されると共に、多数の海外拠点のエンジニアを日本でのOJTにより育成することで、各拠点が従来の下請的立場から独立したエンジニアリング拠点として拡充され、プロフィットセンターとして育てている点です。各拠点では地域市場における自己完結型の取り組みも増えていきますし、拠点間ネットワークを活用して各拠点のメリットを活かした水平分業による事業推進も日常的になっています。この海外4拠点が全てISO9001を取得しており、調達拠点のルクセンブルグ、ヒューストン、ソウルも絡ませた網の目のような連携の下、客先ニーズに応じたベストな組み合わせで事業を有利に展開できる体制となってきました。今や国内と同規模の人的リソースを海外に保有するこのTN体制の更なる拡充は、TECグループとしてのコスト競争力を大きく前進させるだけでなく、グローバル化時代でのトータルソリューションを世界規模で機能させるものです。

三つ目は、“TECの差別化”を活かす選択と集中で、得意なマーケットと品目にフォーカスし、環境変化にいち早く適合したビジネスモデルの開発を推進していくことです。地域としては先述の3大市場に加えブラジル、マレーシア、インドネシアなど、品目としてはプラントライフサイクルへの対応やPMC型やソフトジョブの拡大などがあげられます。こうしたTECの差別化を活かし、ライフサイクルで見た顧客の利益に

かなうようなEPCの先進化に踏み込み、“EPCの高付加価値化”〈Added Value EPC〉を追求していかねばなりません。

もう一つの事業の柱であるIT事業については、PM能力とITの知識を結びつけたところに独特のソリューションを提供できる力がTECには潜在的に備わっており、それを独自の売り物にすべくeソリューションとして資源を集中し、全力で走り始めたところです。ここに現実的な夢を置き、先に分社・上場した東洋ビジネスエンジニアリング(株)とのシナジー効果を活かして、この分野で近未来の売上・利益の向上にも貢献し、事業の安定化を図ることを目指しています。

当社が経営理念として掲げる“顧客満足のためのトータルソリューションの提供”とは、TECのエンジニアリングの総合力とお客様からの信頼性に裏付けられるものと私は考えています。ますます複雑化し、多様化する顧客の要求に敏速に対応していかねばならないと感じています。幅広い視野や知見をもって顧客の満足と信頼を積み重ねていけば、おのずと利益もついてくると確信しています。エンジニアリング会社の資産は人であり、TEC全体が顧客のニーズに対応できる資質を多数擁した人材集団となるのが、これからの時代に勝ち残るポイントだと思えます。



次世代クリーンエネルギーDMEプラントを中国向けに受注 ——エネルギー用途としては世界初のプラント

TECは、2000年8月、中国の大手肥料会社である瀘天化（集団）有限公司に日産2,000トンの大粒尿素プラントを建設しましたが、2002年7月末には瀘天化（集団）有限公司が四川省瀘州（図参照）の新規工業開発区に予定している、大型メタノール、ジメチルエーテル（DME）プラント建設計画の第一歩となる、年産10,000トンのDMEプラントの契約を調印しました。TECの役務範囲は、ライセンス供与、プロセス設計、触媒納入及び技術サービス供与で、2003年第2四半期の完成を目指して現在エンジニアリングが進行しています。

今回建設されるDMEプラントは、DMEのエネルギー用途を視野に置いた世界初となるプロジェクトで、将来的には中国内陸部のエネルギー不足の解消に貢献し得る意義を持ちます。DMEは、日本国内においてもクリーンな新エネルギーとして注目を集めており、LPG代替やディーゼル代替燃料として、将来の大規模な需要拡大が期待されています。

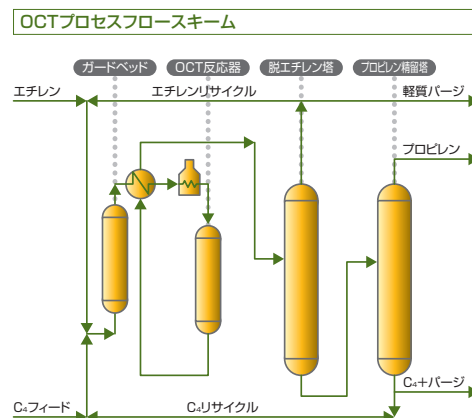
TECは大型化に適した独自技術により年産250万トンまでのDMEプラントに対応可能であり、今回の受注を機に、クリーンな次世代エネルギーであるDMEやガス・ツー・リキッド（GTL）など、天然ガスの新規利用への積極的な事業展開を目指します。



日本初のプロピレン増産技術（OCT）を適用したプラントを受注

TECは、2002年9月、三井化学株が同社大阪工場にて計画を進めていた、プロピレン生産能力を年産280,000トンから420,000トンに増産するプラントを建設するプロジェクトを受注しました。TECは、メインコントラクターとして米国ABB Lummus Global Inc. (LGI社) の技術をベースとしたOCTプラントの建設を請け負い、プラントの完成は2004年8月を予定しています。

今回、プロピレン増産技術として適用されるLGI社の「OCTプロセス」は、触媒を使ってブテン類とエチレンからプロピレンを生産するプロセスであり、設備投資の経済性や世界随一の商業プラント実績、更にはTECとLGI社との40年にわたる技術提携（国内では独占的な提携）に基づく信頼性などがプロセス比較選定の上から評価され、プラント受注につながりました。今回の実績を機に、プロピレン増産への積極的な設備投資が見込まれる日本の石油会社や石油化学会社向けに、OCTプロセスを適用したプラントの連続受注を目指して営業活動を強化していくと共に、今後需要の見込まれる東南アジア地区などにも積極的な営業展開を目指します。





衛生管理に適した独自技術（XYルータ）で 食品プラントエンジニアリングを積極展開

TECは、明治乳業^{やめ}株が福岡県八女市に建設した最新設備の牛乳工場である九州工場向けに、TECの独自技術による配管自動切替装置「XYルータ」を納入しました。食品業界、なかでも衛生管理基準のきわめて厳しいといわれる乳業業界で、「XYルータ」が採用されたのは同社が初めてのことです。

この「XYルータ」は従来のバルブブロック方式の欠点を補うべく開発された装置で、衛生管理や運転制御などの点において優れ、多品種製造にも適した配管自動切替システムです。乳牛業界では、生産工場の集約化に伴いタンク数が大幅に増加しますが、「XYルータ」は高い洗浄性を持ち、交差汚染の心配もなく、また多数のラインへの迅速な切り替えが可能であることから、客先ニーズに合った新たな自動化装置といえます。

TECは、今回の実績をベースに、乳業業界を含めた食品業界全体をターゲットに、「食」の安全性の確保を図る食品プラントエンジニアリングの技術として、今後も「XYルータ」の積極的な営業展開を行ってまいります。



「初の乳業用XYルータ」

X
Y
ル
ー
タ

Y
o
r
o
u
r
t
e
c



R&Dエンジニアリングを積極的に展開、プラント受注にいたる実績も

TECは、自社の技術力・経験・ノウハウなどを生かし、顧客が開発した技術をベースに商業化実現までのプロセスに参画し、商業化までの時間短縮、最適設計によるコストダウン、安全環境面を含めた品質向上などを実現する「R&Dエンジニアリング」を積極的に展開しています。

TECは、顧客が開発した“シーズ”の技術からパイロットプラント、または商業プラントへのスケールアップに必要な、データ解析、解析モデル構築、プロセス最適設計、コストダウン・省エネ検討、基本設計仕様書作成などを行います。これにより顧客は自社のエンジニアリング部門の人員を縮小しながら研究開発にも専念できるため、市場のニーズに即応した商業化の実現が可能となります。更にTECは、開発の初期段階から業務に携わっている強みを生かし、「R&Dエンジニアリング」サービスの完了後、顧客に対して、効率性や安全性などの観点から最適なプラントを提案し、その後の受注契約へと結びつけています。

TECは、1991年に「R&Dエンジニアリング」を実施して以来、既に14件の実績があり、本州化学工業株和歌山工場向けのビフェノール製造プラント（写真）などのプラント受注も実現しています。また昨年12月には本州化学工業株を中心とする日独合弁企業が東部ドイツに建設する特殊ビスフェノール製造設備を受注しました。今後、顧客の海外展開や海外企業も対象に、この「R&Dエンジニアリング」ビジネスを積極的に展開してまいります。



R
&
D
エ
ン
ジ
ニ
ア
リ
ン
グ

Y
o
r
o
u
r
t
e
c

「国際物流総合展2002」に出展

2002年10月15日から19日まで幕張メッセにて開催された「国際物流総合展2002」に、TECは東洋ビジネスエンジニアリング(株) [B-ENG] と共同出展しました。この展示会には国内外から過去最高の約300社以上が出展し、延べ14万5千人の来場者がありました。

TECは“中国”をキーワードに“TECのグローバルSCM”をアピールし、(A) TECのグローバルSCM、(B) リアルタイム情報統合、(C) 何でもインターネット調達、(D) “世界の工場”中国のIT事情、(E) 物流コスト10億削減、の5つのテーマのプレゼンテーションを通して、具体的なソリューションにつき提案しました。開催期間中、TECブースへは約3,000名が来場され、別会場でのTEC主催セミナーも満員となり、TECのグローバルSCMへの積極的な取り組みに対するお客様の高い関心を集めました。



TECと英国アルステック社が使用済燃料の「ボルト貯蔵技術」に関する国内での販売促進契約を締結

TECは、英国アルステック社との間で、同社の「ボルト貯蔵」方式の技術を活用した使用済燃料貯蔵施設の、国内への導入・販売活動を促進する契約を締結しました。この「ボルト貯蔵」方式は、原子力発電所から発生する使用済燃料を“キャニスタ”と呼ばれる金属製容器に収納してコンクリート構造の空洞内で貯蔵する「乾式貯蔵技術」の1つで、“空洞内”(Vault)に貯蔵することから「ボルト」方式と呼ばれています。現在、国内での「金属キャスク貯蔵」方式や海外での「コンクリートキャスク貯蔵」「サイロ貯蔵」などの方式に比較して、この方式では高い貯蔵密度が可能となり、国内では立地やコスト面からの優位性がある貯蔵技術として期待されています。

TECは、国内の原子力発電所内における多くの実績をベースに、今後、国内での本方式による貯蔵施設実現に向け、実用化に必要な技術の蓄積や低コスト化を図り、将来増大が予想される使用済燃料貯蔵のニーズに対応していきます。



(上)「ボルト貯蔵施設(ハンガリー)」
(下)「Mega-Vault 貯蔵システムの外観」

ブラジル向けカビウナスプロジェクト・フェーズ1が完成

Project Completion



TECと現地の大手エンジニアリング会社SETAL社が共同でブラジル・リオデジャネイロ州に建設していた、ブラジル石油公社（PETROBRAS）向けの大型ガス処理設備ならびにパイプライン敷設工事プロジェクトであるカビウナスプロジェクト・フェーズ1が2002年6月、契約通りの工期で完成しました。

このプロジェクトは、ブラジル・リオ沖のカンポス油田にある18基のプラットホーム上から放出される余剰ガスを回収しガス田へ再注入するための設備改造、増産されたガスを運ぶ海底パイプライン、

日産処理能力314MM SCFDのガス処理設備（写真）と177kmの陸上パイプラインから構成されています。また、BLT（Build-Lease-Transfer）方式の事業として推進されていることから、今回工期通りに完成したTECのプロジェクト遂行能力は客先から高く評価されました。今後も引き続き、2003年半ばの完成を目指すフェーズ2、及び2004年半ばの完成を目指すフェーズ3のプロジェクトが継続します。

このTECへの客先評価が、2002年7月の同社・デユク・デ・カシアス製油所向けの減圧残さ油熱分解装置のSETAL社との共同受注に結びついています。

ドイツ・中国合併の総合石油化学コンビナート向けに TECが大型EPCプラント2件を同時受注

New Orders



TECは、2002年第4四半期に三井物産（株）と丸紅（株）の協力を得て、ドイツBASF社（世界最大級の総合化学グループ）と、SINOPEC社（中国最大の総合石油化学会社）が折半で出資した合弁会社、BASF-YPC社が中国江蘇省・南京で計画を進めている総合石油化学コンビナート向け、アクリル酸（年産16万トン）及びアクリル酸エステル（年産21.5万トン）と、オキシアルコール（年産25万トン）の2つのプラントを同時受注しました。当社の業務範囲は、詳細設計、機器資材の調達及び工事までの一括請負で

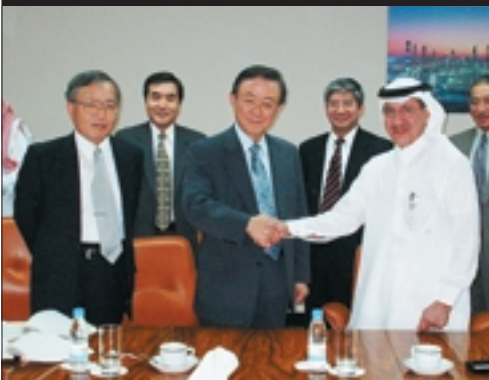
あり、両プラントの完成予定は2004年第4四半期を予定しています。

今回受注に至った背景は、中国における約30年間にわたるSINOPEC社向けプロジェクトの実績や、マレーシアでのBASF社向けプロジェクトの成功、ならびにその優れた技術やノウハウと信頼性の高いプロジェクト遂行能力などが評価されたことによるものです。

今回の受注を契機に、TECはBASF社をはじめとする欧米企業の中国への石化投資計画に対して、積極的に参画してまいります。

サウジアラビア向け世界最大のEO・EGプラントを受注

New Orders



TECは、昨年5月半ばに三井物産(株)の協力を得て、サウジアラビアのJubail United Petrochemical Company (UNITED) [サウジアラビア基礎産業公社 SABIC (Saudi Arabian Basic Industries Corporation) の100%子会社] が、同国東海岸に位置するアルジュベール工業地区のエチレンオキサイド (EO)・エチレングリコール (EG) プラント製造設備 (EG 630,000トン/年) を受注しました。米国Scientific Design社の技術をベースに、当社の役務範囲は、設計、機器資材の調達及び工事までの一括

請負いであり、プラントの完成は2004年第3四半期を予定しています。

TECは、Scientific Design社の技術によるEO・EGの実績では世界一を誇り、客先の高い信頼を得て、欧州や韓国の競合先との厳しい国際入札競争の結果、今回の受注にいたりました。今回のプロジェクト受注は、TECの優れた技術やノウハウ、プロジェクト実績などが実を結んだものであり、海外の重点マーケットである中東地域における積極的な営業活動の成果といえます。

Petrochemical Project

TECが客先コンサルタントとして大阪地域の新LNG基地建設工事をサポート

Project Under Way



堺エル・エヌ・ジー(株)のLNG受入センター建設工事(発注者側コンサルタント:TEC、受入量:270万トン/年、14万klタンク×3基、受注者:三菱重工(株))は、現在敷地造成工事及びLNGタンクの杭打ち工事が完了し、順調に進捗しています。本建設工事は関西電力(株)の南港、大阪発電所、堺港の各発電所向けへのLNG供給センターとして計画され、建設運営は堺エル・エヌ・ジー(株) [関西電力(株)、岩谷産業(株)、

宇部興産(株)、コスモ石油(株)の出資による合弁会社] が行います。

本プロジェクトは関西電力(株)での初めての一括発注方式によるプロジェクトであり、TECがこれまで数多く手がけた一括発注方式でのプロジェクト経験が評価され、2000年8月の入札ベース (ITB) 作成段階より発注者側のコンサルタントとして本プロジェクトに参画しています。

TECはこれまで、コストダウンとプロジェクトの円滑な遂行を図るべく、エンジニアリング会社の知見を生かしたITB作成助成、海外も含めた市場価格調査、設計レビューなどを通して、客先のプロジェクト実施をサポートしてまいりました。現在プロジェクトは、2006年1月の竣工を目指して順調に進行中であり、今後もTECは「顧客の成功支援企業」へと邁進してまいります。

Oil & Gas Project

【ソウル事務所の現状と役割】

(Toyo Engineering Korea Ltd.)



ソウル事務所の入っているビル

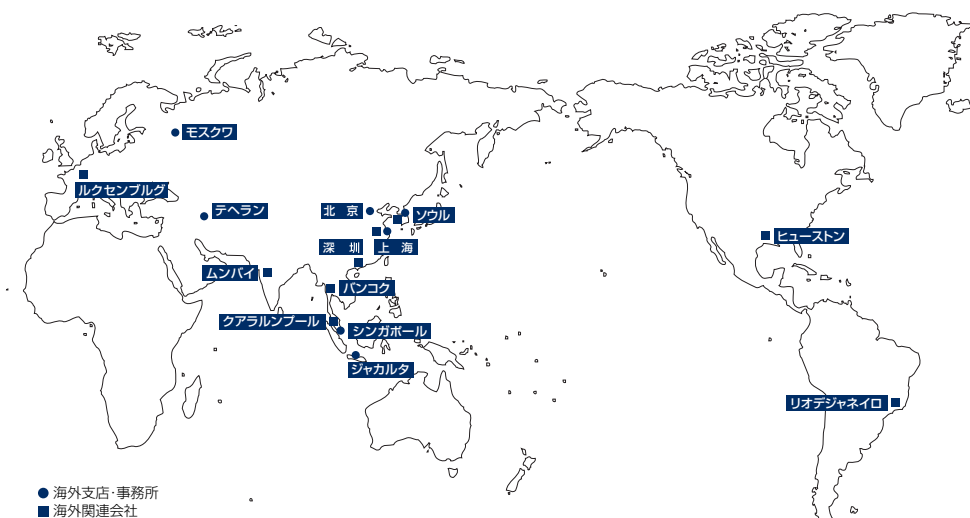
1997年の経済危機を、外資導入と構造改革により急速に克服した韓国は今、「世界における新しい価値の創造」に向け、国を挙げて取り組んでいます。エンジニアリング産業を取り巻く環境も、過去に言われたような「低価格だが低品質」のイメージから脱却し、世界市場において、「高い競争力と高品質」の認識を得られつつあります。

1987年12月、韓国におけるTECのエンジニアリング拠点として発足したソウル事務所（TEC-K）は、韓国エンジニアリング業界の発展と共に歩み、その礎を築いてまいりました。以来、TECのプロジェクトを主として、韓国国内のプラント建設はもとより、海外を含む180以上のプロジェクトに関わり、TECの海外戦略を担う重要なエンジニアリング拠点として発展してきました。現在は約200名の社員を擁して、基本設計から工事管理、運転助勢まで一貫したエンジニアリングの提供ができる体制を構築しており、TEC-K単独のプロジェクトのみならず、TECのトランスナショナル体制においても、今後ますますその重要性を増してきております。

また、韓国の装置メーカーに対する卓越した見識と購入実績をベースとした、機器調達サービスも提供しており、高い評価をいただいております。

2002年8月には新オフィスへの移転も完了し、より質の高いサービスの提供を通じて、Customer's Satisfaction（顧客満足）を得られるよう努力してまいります。

海外ネットワーク



● 海外支店・事務所
■ 海外関連会社

東洋エンジニアリング株式会社(TEC)

本社

〒275-0024 千葉県習志野市茜浜2丁目8-1

Tel: 047-451-1111 Fax: 047-454-1800

URL: <http://www.toyo-eng.co.jp/>

東京本社

〒100-6007 東京都千代田区霞が関3丁目2-5

Tel: 03-3592-7411 Fax: 03-3593-0749

技術研究所

〒297-0017 千葉県茂原市東郷字富士見1818

Tel: 0475-24-4551 Fax: 0475-22-1338

関西支店

〒532-0011 大阪府大阪市淀川区西中島6丁目1-1

Tel: 06-6390-1101 Fax: 06-6390-1201

海外支店・事務所

シンガポール支店

81 Anson Road, #08-02, Singapore 079908

Tel: 65-6226-1996 Fax: 65-6226-0293

北京

E. 7th Fl. Bldg. D, Fuhua Mansion, Chaoyangmen North Avenue No. 8, Beijing 100027, China

Tel: 86-10-6554-4515 Fax: 86-10-6554-3212

上海

Suite 211, CIMIC Tower, 800 Shangcheng Road, Pudong, Shanghai 200120, China

Tel: 86-21-5835-6500 Fax: 86-21-6876-3861/3862

ジャカルタ

Midplaza 8th Fl., Jl. Jendral Sudirman Kav. 10-11, Jakarta 10220, Indonesia

Tel: 62-21-570-6217/5154 Fax: 62-21-570-6215

モスクワ

Room No. 605, World Trade Center, Krasnopresnenskaya Nab., 12, Moscow 123610, Russia

Tel: 7-095-258-2064/1504 Fax: 7-095-258-2065

ソウル

Toyo Bldg. 677-17, Yeoksam-1 Dong, Kangnam-ku, Seoul, 135-081, Korea

Tel: 82-2-557-7098 Fax: 82-2-539-5867

テヘラン

No. 4 Sixth Street, Ahmad Ghasir Ave. (Ex. Bokharest), Tehran, Iran

Tel: 98-21-873-8414 Fax: 98-21-873-2642

海外関連会社

ルクセンブルグ、ヒューストン、リオデジャネイロ、上海、
ムンバイ、ソウル、深圳、バンコク、クアラルンプール

※海外関連会社の最新住所及び連絡先は当社ホームページの「海外の関連会社」をご覧ください。